

日本オーラル・ヒストリー学会第14回大会プログラム

Japan Oral History Association 14th Annual Conference

開催：2016年9月3日（土）・4日（日）

一橋大学佐野書院（3日・4日午前）

如水会百周年記念インテリジェントホール（4日午後）

同時開催：9月3日～4日 保苺実写真展（一橋大学佐野書院ロビーにて）

大会参加費

会員（一般・学生他ともに）：1,000円（2日通し）

非会員 一般：2,000円（1日参加 1,000円）

非会員 学生他：1,000円（1日参加 500円）

※懇親会のご案内※

9月3日（土） 18:00～20:00

会場：一橋大学佐野書院 第一室（buffet形式）

参加費：3,000円、学生その他 1,500円

（お支払いは受付時をお願いいたします）

学会員・非学会員の皆さま、一般・学生の皆さまともに、
ふるってご参加いただき、この機に交流を深めていただきたく存じます。

《大会開催校より》

JOHA 第 14 回大会開催校理事 小林 多寿子（一橋

大学）

一橋大学はオーラルヒストリー研究のメッカといわれ、日本のオーラルヒストリー研究の基礎を築いた方々、先端を切り拓いた方々を輩出してまいりました。なかでも、1994年卒業生の保莉実さんはオーラルヒストリー研究の最先端を切り拓き、輝かしい足跡を残されています。今年度は、この一橋大学でJOHA第14回大会が開催されることになりました。保莉実記念シンポジウムをはじめ一橋大学ならではの充実した企画を予定しています。とくに一橋大学大学院社会学研究科は共催者として本大会を支援し、新たなオーラルヒストリー研究進展の機会となることを願っています。ご参加のみなさまを心より歓迎いたします。

開催校理事：小林多寿子、赤嶺淳、平井和子

JOHA 会長：有末賢、学会事務局：佐々木てる、研究活動委員会委員長：蘭信三、会計：中村英代

大会開催中、何かご不明な点がございましたら、受付でお問い合わせください。

自由報告者へのお願い

- 自由報告は、報告 20 分・質疑応答 10 分（合計 30 分）で構成されています。
- パソコンの動作確認等は各分科会の開始前にお願いいたします。その際は会場係にお声がけください。
- 配布資料がある場合はその旨会場係お伝えください。

参加者へのお知らせ

- 会員・非会員ともに両日の受付をお願いいたします。
- 昼食は JR 国立駅および一橋大学周辺の食堂等のご利用をお願いいたします。
会場近辺にコンビニ等はございません。
- 大きな荷物を佐野書院 1 階ロッカールームに一時置くことができますが、スタッフが常時しておりませんので貴重品は各自管理をお願いいたします。

1. 大会プログラム

第 1 日目 9 月 3 日 (土)

12:00 受付開始

13:00～15:30 自由報告

第 1 分科会 (一橋大学佐野書院会議室) 司会：橋本みゆき・大門正克

- 1-1 芸能享受心性の合目的性 川崎瑞穂 (国立音楽大学)
- 1-2 かくれキリシタン信仰における「伝説」に関する一考察—長崎県を事例として
小泉優莉菜 (神奈川大学)
- 1-3 陸前高田市立第一中学校避難所で「福祉避難室」はいかにして成立したか—高齢者を支援した被災者たちの語りから 齋藤公子 (立教大学)
- 1-4 薬草、ARV、バイアグラ—北部タイ農村における HIV/AIDS の薬剤誌 日野智豪 (東京福祉大学)

第 2 分科会 (一橋大学佐野書院第 1 室) 司会：石井 弓・倉石一郎

- 2-1 調査対象者と同じ属性を有することによる調査の困難 徳安慧一 (一橋大学)
- 2-2 海外調査で得られたデータ分析の妥当性 山崎晶子 (一橋大学)
- 2-3 日中通訳者のオーラルヒストリーから見る通訳規範意識とその形成要因
平塚ゆかり (順天堂大学)
- 2-4 女性研究者が「男性の経験」を語ることの困難 関根里奈子 (一橋大学)
- 2-5 アウシュヴィッツのガイドたち—オラリティと感情労働の視点から 田中雅一 (京都大学)

15:45～17:45

シンポジウム (一橋大学佐野書院会議室)

保苺記念シンポジウム—いまあらためて「保苺実の世界」を探る

司会：小林多寿子 (一橋大学)

第一報告 原爆被害の歴史実践と対話の可能性—保苺実への応答として

八木良広 (愛媛大学)

第二報告 歴史が聞こえてくること—方法的ラディカリズムと歴史への愛

野上 元 (筑波大学)

第三報告 実証主義とテキスト主義を超えて—歴史研究者は保苺実から何を得たか

松井康浩 (九州大学)

《シンポジウム概要》

一橋大学は日本におけるオーラルヒストリー研究のメッカだ。これまで数々のオーラルヒストリアンを生み出したが、なかでも伝説的な存在となっている保莉実の存在は光を放っている。そこで、一橋大学で JOHA 第 13 回大会を開催するにあたって、若き保莉が学び、歴史学をこえる新たな道標となるような「保莉実の世界」を培った国立キャンパスにおいて、「いまあらためて保莉実の世界を探る」シンポジウムを開催する。

保莉実の『ラディカル・オーラル・ヒストリー』（2004）をめぐっては、その学説史的な意義、方法的な可能性、そして保莉実の生き方としての歴史実践等々についてこれまでも論じられてきた。しかし、保莉没後 12 年経った本年、しかも「歴史研究にとってのオーラルヒストリー」を今次の共通課題とするにあたり、その記念碑的な研究が培われた一橋大学において、「保莉実の世界」が今どのように読みつがれるのかを JOHA が問い直すのは絶好のタイミングであろう。

登壇者としては、歴史学者として市民の手紙や日記や回想録といったエゴ・ドキュメントに着目して新たな歴史学を切り拓く松井康浩さん（九州大学）、語りや記念碑や表象を素材に歴史社会学や戦争社会学を切り拓く野上元さん（筑波大学）に登壇をお願いし、JOHA の若手を代表して被爆経験のライフストーリーを深める八木良広さん（愛媛大学）に登壇し、それぞれの立場から保莉実の世界を論じる。司会は一橋大学の小林多寿子さんが務める。

18：00～20：00

懇親会（一橋大学佐野書院 第1室）

第 2 日目 9 月 4 日 (日)

9:00 受付開始

9:30～12:00 自由報告

第 3 分科会 (一橋大学佐野書院第 1 室) 司会: 人見佐知子・山田富秋

- 3-1 社会の周縁を調査する上でのリスク評価と回避法確立の重要性 大島 岳 (一橋大学)
- 3-2 「科学」というちっぽけな銃を片手に僕たちはく語られる人生>に挑む
ー犬死しないために、フィルター理論からみるライフストーリー論再考 田野綾人 (立教大学)
- 3-3 1960 年代 70 年代の沖縄をめぐる人類学・民俗学の周辺 猪岡叶英 (大阪大学)
- 3-4 スタッズ・ターケルの作品の意義について 栗木千恵子 (中部大学)

第 4 分科会 (一橋大学佐野書院会議室) 司会: 佐藤 量

テーマセッション: 「満洲の記憶」とオーラルヒストリー

- 解題 「満洲の記憶」とオーラルヒストリーを問うということ 佐藤 量 (立命館大学)
- 4-1 帰国邦人団体の会報から見る戦後日本の「満洲の記憶」
ー安東会会報『ありなれ』の分析を中心に 菅野智博 (一橋大学)
- 4-2 満洲国軍陸軍軍官学校の朝鮮人ー「日系」として入校した唯一の朝鮮人・金光植の語りから
飯倉江里衣 (東京外国語大学)
- 4-3 満鉄留魂碑建立をめぐる紛糾と満鉄魂の顕彰について 湯川真樹江 (学習院大学)

12:05～13:00

総会 (如水会百周年記念インテリジェントホール (一橋大学国立西キャンパス))

14:00～17:00

シンポジウム (如水会百周年記念インテリジェントホール)

日本軍「慰安婦」問題とオーラル・ヒストリー研究の／への挑戦

司会 平井和子 (一橋大学)

趣旨説明 日本軍「慰安婦」問題とオーラル・ヒストリー研究の／への挑戦

山本めゆ (日本学術振興会特別研究員 (津田塾大学))

第一報告 韓国の「慰安婦」聞き取り作業の歴史ー「証言集」を中心に

山下英愛 (文教大学)

第二報告 フィリピン・セブにおける日本軍性暴力ーBC 級裁判資料を中心に

岡田泰平 (静岡大学)

第三報告 日本人「慰安婦」被害者のテキストを読むー城田すず子さんの資料に注目して

木下直子 (日本学術振興会特別研究員 (大阪大学))

コメント一 佐藤文香 (一橋大学)

コメント二 成田龍一 (日本女子大学)

《シンポジウム概要》

日本におけるオーラル・ヒストリー実践の底流には、アジア・太平洋戦争や「大日本帝国」の植民地にかかわる様々な経験への振り返りがあった。その系譜は日本オーラル・ヒストリー学会に引き継がれ、2003年の学会発足以来、戦争・植民地に関するオーラル・ヒストリー実践は促進されてきた。しかし、本学会が今日まで十分に引き受けてこなかった課題がある。その一つが、アジア・太平洋戦争に伴う同地域に広がる日本軍「慰安婦」問題である。

1990年代以降、日本軍「慰安婦」問題をめぐる日本国内の論争の過程はいくつかの時期に区分されよう。近年、研究や運動のグローバルな展開、日韓両国政府の動きや歴史認識をめぐる対立の激化などに伴い、国内の議論はいつそう混迷を深め、この論争は新たな局面を迎えているといわれる。オーラル・ヒストリー研究に期待される役割も、それとともに変化し、歴史修正主義的な否認言説への応戦にとどまらない貢献が求められるようになってきている。同時に、日本軍「慰安婦」問題を通じてオーラル・ヒストリー研究やその方法論もまた、批判的な検討が迫られている。

そもそも、本問題は韓国人元「慰安婦」の名乗り出（1991年）によって社会問題化され、その「証言」が争点の一つであった。そこでは、オーラル・ヒストリー研究は大きな役割が期待されていたにもかかわらず、本学会の主要課題として取りあげられることはなかった。

このような経緯で、私たちは本学会において日本軍「慰安婦」問題に正面から挑んでみることにした。本パネルでは、韓国、フィリピン、日本における多様な事例を、聞き取り、裁判資料、テキストを用いた広義のオーラル・ヒストリー実践を通して検討していく。この挑戦は、オーラル・ヒストリー研究の可能性を拓くとともに、日本軍「慰安婦」問題や戦時性暴力をめぐる研究のさらなる深化を可能とするだろう。

2. 自由報告要旨

第1分科会

1-1 芸能享受心性の合目的性

A Study on the Purposiveness in the Audiences' Mentality in the Reception of Performing Arts

川崎瑞穂 (Kawasaki Mizuho 国立音楽大学)

民俗芸能の上演に際しては、芸能それ自体の目的とは関係なく、その芸能の何がしかの記号（要素）ゆえに、それが時宜に適うものであるとみなされることがよくある。例えば筆者が調査している秩父市荒川白久の神明社神楽は、毎年4月20日に秩父市大滝の大達原稲荷神社例大祭でも上演されているが、その際には、当地の信仰（稲荷信仰）に合わせて狐の演目が必ず上演されてきた。このような、芸能自体の目的ではなく、芸能の「享受」にまつわる心性については、ことに芸能史研究の領域で蓄積があるものの、オーラル・ヒストリーの領域においてこれを扱った研究はほとんどない。本発表では、フランスの哲学者ポール・リクールの解釈学などを参照しつつ、オーラル・ヒストリーに依拠した「芸能享受心性の合目的性に関する解釈学的研究」の必要性を指摘する。

1-2 かくれキリシタン信仰における「伝説」に関する一考察—長崎県を事例として—

A Study on the Kakure-kirishitan Faith's Legends: With a Focus on Nagasaki Prefecture

小泉優莉菜 (Koizumi Yurina 神奈川大学)

長崎県における「かくれキリシタン信仰」には、真偽性を別として多くの伝説が存在する。現在の信者らはそれらを信仰儀礼に関する一部として、口伝しつづけている。例えば、絵踏み時の役人の「見逃し」が挙げられる。これは絵踏みの時に役人がキリシタンである農民を見逃した、という伝説である。日本側（幕府）の史料にはこのような出来事は記されていないが、江戸期に日本に潜伏しながら当時の状況を記していた宣教師たちの史料には、これに類似する出来事が記されている。さらに現在のかくれキリシタン信者らは、これらの伝説を自身らの信仰上のアイデンティティとしても語っている。本発表では、イタリア国立マルチャナ図書館での史料調査と、信者への聞き取り調査から、その伝説の信憑性と、現在のかくれキリシタン信仰における意義について考察する。

1-3 陸前高田市高田第一中学校避難所で（福祉避難室）はいかにして成立したか—高齢者を支援した被災者たちの語りから

How Did They Run the “Welfare Evacuation Room” at Rikuzentakata Daiichi Junior High School?: Experiences of Disaster Victims Who Provided Support to the Elderly

齊藤公子 (Saito Kimiko 立教大学)

厚生労働省は2008年に「福祉避難所設置・運営に関するガイドライン」を公開し、市区町村が大規模災害時にとり組むべき福祉避難所関連の施策を明示した。だが複数の調査によれば、「災害時要援護者」を支援するその施策は、東日本大震災の発災時「ガイドライン」どおりに実施されることがほとんどなかった。

本報告は、東日本大震災により甚大な被害を受けた陸前高田市において、大規模避難所の運営に携わった被災者2名の語りにもとづき、そこで高齢者支援が誰によってどのように担われ、どのような困難に直面したかを詳らかにする。同時に、福祉避難所の一形態とされる「福祉避難室」が、「ガイドライン」の想定とは異なったプロセスを経て、被災者たちの判断によりいかにして設置され、運営されたかをも

明らかにし、災害時要援護者支援における課題を提示する。

1-4 薬草、ARV、バイアグラー北部タイ農村における HIV/AIDS の薬剤誌ー

Herb, ARV, Viagra-The Ethnography of HIV/AIDS in Northern Thai Rural Village

日野智豪 (Hino Tomohide 東京福祉大学)

本報告は、タイ全土において HIV 罹患率の最も高い地域である北部タイ農村に着目し、当地での HIV/AIDS 治療を HIV 感染者と薬剤の関係、そして薬剤をめぐる共存・拮抗関係から分析する試論である。議論は、報告者が 2004 年から現在に至るまで断続的に実施した約 30 ヶ月間の文化人類学的定着調査 (参与観察、アクション・リサーチ、個別の聞き取り) によって得られたデータに基づくものである。

本報告においては、HIV 感染者の身体状況に薬剤が及ぼす影響として①北部タイに伝統的に伝わる薬草の知識、知恵、感染者の生きるための戦略、薬草医のつながり、②薬草と ARV (抗 HIV ウィルス薬) の共存・拮抗関係、さらには、③近年、農村に普及したバイアグラと ARV の関係性、それに影響される感染者の「現在」の様相、を感染者への聞き取り調査から明らかにしていく。

第 2 分科会

2-1 調査対象者と同じ属性を有することによる調査の困難

Difficulties in being the same characteristics as respondents

徳安慧一 (Tokuyasu Keiichi 一橋大学)

例えば出自や家族構成などの点で、調査者と対象者が類似した属性を有することは調査過程を円滑にすることに役立つ場合がある。しかし、時に同じ属性を持つことは、調査者が同じ考えや意見を持つものだと対象者に誤解を与える可能性も含んでいる。研究の立場上同意しかねる言動が対象者から発せられた時、調査者はどのように振る舞うべきなのか。また、分析・考察、そして対象者フィードバックにあたって、こうした調査過程をどのように扱えばよいのだろうか。

本報告では、男子校出身の報告者が同年代の男子校 OB へのインタビューをおこなった際に出会った「ホモソーシャル」な語りを事例に、両者が同じ属性を持つことでもたらされる調査上の諸困難を検討する。

2-2 海外調査で得られたデータ分析の妥当性

Validity of the data analysis obtained by the Overseas Research

山崎晶子 (Yamazaki Akiko 一橋大学)

本報告は「外国人による調査において得られたデータ分析の妥当性はいかに担保されるのか」という問題について検討することを目的とする。報告者はフランス社会をフィールドとしてフランス語でフランス人「エリート」にインタビュー調査を行ってきた。こうした「よそ者」による聞き取りは聞き手のそうした属性故の障壁を伴うのではないか。例えばインタビュー時の質疑応答における相互の意図に誤解はないか。また、日本語訳したデータの分析結果をいかに語り手に確認すれば良いのか。この問題は報告者固有のものではなく、海外で調査するあらゆる研究に共通の問題だと考える。本報告を通じて海外調査におけるデータ分析の妥当性を巡る問題について解決策を探りたい。

2-3 日中通訳者のオーラルヒストリーから見る通訳規範意識とその形成要因

Oral History of Chinese-Japanese Interpreters: How Their Norms are Formed

平塚ゆかり (Yukari Hiratsuka 順天堂大学)

本研究は日本語・中国語の会議通訳者である現代の日中通訳者のオーラルヒストリーを分析・検証した

ものである。

通訳行為においては、起点言語は同じでも通訳者・翻訳者によって目標言語のメッセージ形式や表現、時には内容までも異なる場合がある。ここには、通訳者の役割観、そして通訳者の規範意識が密接に関わっている。

本発表では、中国語を母語とする通訳者3名と日本語を母語とする通訳者3名の語りを取り上げ、通訳者が語りのなかで明示した通訳者としてあるべき姿としての「規定性規範」(王, 2013)と、「語り手を表す表象的な表現」(桜井, 2012)から、実際の通訳行為の根底に存在する実際の通訳規範意識に着目し、社会的・文化的背景など、規範の形成要因について考察する。

2-4 女性研究者が「男性の経験」を語ることの困難

Practical problems of a women researcher talking about “the experience of the man”

関根里奈子 (Sekine Rinako 一橋大学)

報告者はこれまで女性研究者として男性性研究に携わってきた。その際、参与観察において「男性文化」に馴染めず調査が難航したこともあり、また学問上、女性研究者が男性性研究を行うことに関する立場性の問題に悩まされてきた。

とりわけ女性学、男性学という当事者性を重んじる領域から発展してきたジェンダー研究の領域では、当事者でない者が研究対象について語る際の権威性についての議論が多くなされてきた。それを踏まえ本報告では、とりわけ参与観察を伴う質的調査において、男性としての経験を有さない「女性研究者」が男性性研究を行う上での調査上の困難を提示する。その上で、当事者でない者が行う研究とはいかなる姿勢をもって臨めば良いかについて検討したい。

2-5 アウシュヴィッツのガイドたち オラリティと感情労働の視点から

Tourist Guides at Auschwitz: From the Point of View of Orality and Emotional Labor

田中雅一 (Takana Masakazu 京都大学)

戦争や虐殺、災害の凄惨な経験を当事者(生存者)が「客観的に」語ることはきわめて難しい。では、当事者に代わってこうした経験を語る場合はどうだろうか。その際重要なのは、客観的事実だけではなく、適切な感情を喚起することである。本発表では、アウシュヴィッツ博物館で働くガイドたちがどのような配慮をもってアウシュヴィッツでの大量殺人を訪問者に語るのかということについて、オラリティと感情労働の視点から考察したい。オラリティについてはリテラシーとの関係で、感情労働をめぐる議論は主としてサービス産業や医療現場で深められてきた。本発表ではガイドの語りをもとにオラリティと感情労働についての従来の議論を検討したい。

第3分科会

3-1 社会の周縁を調査する上でのリスク評価と回避法確立の重要性

The importance of risk evaluation and methodological integration when conducting social research on marginalized cultures.

大島 岳 (Oshima Gaku 一橋大学)

ライフストーリーやオーラルヒストリー研究のもっとも特徴的な強みの一つは、既存の社会や歴史から見落とされてきた社会や歴史の周縁にいる人びとの経験、つまり「下からの声」を伝えることができる点にある。こうした社会の周縁に身を置く人びとは安全や健康の不平等に晒されていることが多く、

ゆえに対象者の生きられた経験に可能なかぎり接近を試みると、調査者も同様のリスクに遭遇する機会も少なくない。本報告では調査過程で遭遇するリスクの扱いを方法論的に精緻化していく重要性について、困難例をもとに考察する。

3-2 「科学」というちっぽけな銃を片手に僕たちは<語られる人生>に挑む—犬死しないために、フィルター理論からみるライフストーリー論再考

We challenge “life stories” to fight with tiny gun that is called “science”: Rethink “Life story theory” by using the “filter theory”.

田野綾人 (Tano Aya 立教大学)

今日、行われている研究の殆どが、自身が使う手法の「科学的正しさ」を主張してから本論に入っている。しかし、ライフストーリー研究においては桜井厚がいうように「対話的構築主義」という限界を常に意識しなければならない。即ち、研究者は、協力者が語る人生の圧倒的な神秘性や力強さを前にして、「科学」というここではロクに使えない武器を持って対峙しなければならない。本報告は「対話的構築主義」において何が起きているのか、報告者がフィルター理論を用いて説明するものである。「科学」という手法で説明される<語られる人生>は、面白さに欠ける(かもしれない!)が、「社会」に何かを要求するとき、より説得力を持つことは明白である。我々はいま、犬死しないためにも、もう一度考える必要がある。

3-3 1960年代70年代の沖縄をめぐる人類学・民俗学の周辺

Around a study of folklore and anthropology in Okinawa from 1960's to 1970's

猪岡叶英 (Inooka Kanae 大阪大学)

1960年代70年代は、沖縄の全島にわたる本格的な滞在型の調査によって人類学・民俗学研究の進展が図られた時期である。他方で、当該期の調査に研究者以外に関わった人々が、どのように調査に協力し、彼・彼女らがそこに何を見て、どのように感じたのか、その内実は判然としない。当時の沖縄をめぐる人類学・民俗学の研究実践をとらえなおすためには、様々な形で調査研究に携わった人びとの声に耳を傾ける必要があると考える。

本報告では、1960年代はじめに行われた社会人類学による村落および家族・親族関係の調査に協力した女性(大阪市住之江区在住)の語りに着目する。彼女は、糸満高等学校郷土研究クラブの活動の一環として調査に関わることになった。彼女が郷土研究クラブに所属した経緯、調査に協力したことによって地域の歴史や文化を捉える彼女のまなざしに変化が生じた点を考える。また、高校卒業を機に本土へ就職し、沖縄出身の第二世代の男性と結婚した彼女が大阪で生活をする中で過去の調査経験がいかなる影響を与えているのかについても明らかにする。

3-4 スタッズ・ターケルの作品の意義について

Significance of the Works of Studs Terkel

栗木千恵子 (Chieko Kuriki 中部大学)

ジャーナリストでオーラルヒストリアンとしても名高いスタッズ・ターケルの作品の意義を、米国のオーラル・ヒストリー及びジャーナリズムの観点から、本人への聞き取りなどを踏まえて論考するものである。歴史に残らない普通の人々に強い関心を持ち、本音を引き出し、主観を極力排してまとめた一連の作品は双方の領域に先駆的な役割を果たした。『大恐慌』では伝統的な歴史学的手法に該当しないと当初批判を浴びたが、大恐慌を体験した人々の「記憶を書く」手法は、現在では受け入れられている。また客観的な事実だけでは伝えきれないものを伝える試みである「語り」を重視するナラティブ・ジャ

ーナリズムの先駆けとしても意義があった。ターケルの作品はこの双方の領域を接続し、作品として世に問うたことで生きた歴史を記録し伝えることに貢献したと考えられる。

第4分科会 : テーマセッション「満洲の記憶」とオーラルヒストリー

本セッションでは、満洲引揚者たちの原体験が記憶の語りとして構築されていく過程を追う。「満洲の記憶」が論じられて久しいが、戦後70年が経過した現在、引揚者の生の声を通して満洲の歴史と記憶を問い直すことができる最後の時期といえよう。

戦後社会において満洲引揚者の語りはけっして自由ではなかった。社会学や歴史学の先行研究が示すように、戦後における満洲経験や植民地経験はマスターナラティブやナショナルヒストリーとの相互関係のなかで規定されてきたからである。実際には極めて多様で複雑な満洲経験があるものの、当事者たちは子や孫に語ることも少なく、その記憶は閉じられた引揚者コミュニティのなかで共有されてきた。

そこで本セッションでは、満洲引揚者たちの記憶の語り、戦後社会のなかでどのような葛藤や衝突を経て構築されてきたのかを、当事者への聞き取りをはじめ、回想録や会報などの史料分析を通して実証的に考察する。はじめに、司会を務める佐藤が満洲の歴史と記憶をめぐる議論を概観する。続いて菅野報告では、満洲引揚者団体が戦後継続的に刊行してきた会報を取り上げ、その記述内容がどのように変化してきたかを論じる。飯倉報告では、満洲国軍に所属した朝鮮人の戦後を取り上げ、戦後韓国社会における元満洲国軍人の語りを分析する。湯川報告では、元満鉄社員たちによる記念碑建立を事例に、戦後日本社会における満鉄の記憶をめぐる葛藤について考察する。

解題 「満洲の記憶」とオーラルヒストリーを問うということ

Opening Remarks: Rethinking the "Memories of Manchuria" and Oral History.

佐藤 量 (Sato Ryo 立命館大学)

4-1 帰国邦人団体の会報から見る戦後日本の「満洲の記憶」－安東会会報『ありなれ』の分析を中心に

The Memories of Manchuria : An Analysis Based on the Journal of Repatriate from Manchuria

菅野智博 (Kanno Tomohiro 一橋大学)

本報告は、日本敗戦後に満洲から引揚げてきた日本人が結成した各種団体により刊行された会報に着目し、その刊行背景と内容から引揚者が戦後どのように満洲体験を語り、その記憶に向き合ってきたかについて初歩的な分析を行うものである。本報告で用いる会報は、従来の研究において部分的に用いられているものの、長期的なスパンのなかで諸団体や会報の記述内容がどのように変化したのかについて未だ十分に位置づけられていない。満洲経験者の高齢化や引揚者団体の解散にともない、様々な記憶や記録が散逸しつつある現状において、満洲経験者の手記や回想が掲載された会報は、満洲の記憶の変遷を検討する貴重な手がかりとなると考える。

4-2 満洲国軍陸軍軍官学校の朝鮮人－「日系」として入校した唯一の朝鮮人・金光植の語りから

Koreans in the Military Academy of the Manchukuo Imperial Army through Oral History Materials

飯倉江里衣 (Ikura Erii 東京外国語大学)

本報告では、1939年に「満洲国」の新京郊外に設立された満洲国軍の将校養成機関・陸軍軍官学校(以下、軍校)へ入校した朝鮮人に注目し、軍校受験の背景や採用のされ方、教育経験についての当事者による口述資料を文献資料と相互参照しながら論じることで、これまでほとんど知られてこなかった朝鮮人の軍校入校前後の具体的様相をみていく。本報告で中心的にとりあげる軍校第7期生の金光植は植民地朝鮮で皇民化教育を受けた世代にあたるが、徹底的に「日本人」化されたうえで、朝鮮人で唯一「日系」として軍校に採用されている。金の記憶と語りからは、軍校の実態は採用制度と内実の両面において「五族協和」や「内鮮一体」の理念とは乖離していたことが明らかとなる。

4-3 満鉄留魂碑建立をめぐる紛糾と満鉄魂の顕彰について

A Discussion on the Memorial Monument Built to Honor the Spirit of South Manchuria Railway Company

湯川真樹江 (Yukawa Makie 学習院大学)

本報告では満鉄会による「満鉄留魂碑」の建立をめぐる生じた紛糾や記念碑への思い、掲載文言に関する議論について紹介し、昭和50年代に満鉄会が紆余曲折を経て留魂碑を建立する様子を確認していく。その中で噴出した数々の異なる意見や、土地提供者との意見対立、立地の見直し経緯の様相を明らかにし、彼らが如何に留魂碑を造り上げていったのかを考察する。

また同時に満鉄事業への回顧がなされ、「思い起こされた」満鉄魂の「顕彰」が進められていく中で、反帝国主義的な社会風潮に根差した反対意見との衝突を避けるように、立地や形態を妥協していく様子を、元満鉄施設局計画課長で建築小委員会委員であった山内丈夫の往復書簡から確認する。